

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652175

研究課題名(和文) 島嶼地域における洞穴遺跡の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Study of the Archaeological Cave Site in the Ryukyus.

研究代表者

新里 貴之 (SHINZATO, Takayuki)

鹿児島大学・埋蔵文化財調査センター・助教

研究者番号：40325759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：考古学、動物考古学、植物考古学、人類学から多角的・実証的に沖永良部島鳳雛洞第4洞口遺跡を検討した。その結果、洞穴内部が狭く、平坦面がほとんどないこと、水量に乏しいこと、光がほとんど届かないことなどから、恒常的に使用していないと判断された。また、遺物数が少なく、遺物組成も土器と貝製品のみであり、土器が一定パターンで廃棄されていること、食料残渣として南西諸島で普遍的に確認される海産貝類はないが、ウシの骨のみが散在していること、炉から炭化オオムギに限定されて高密度で確認されたこと(この時代の奄美にはコメ、コムギ、オオムギ、アワ、キビがある)などから、同洞穴は農耕に関わる祭祀遺跡であると結論づけた。

研究成果の概要(英文)： This study is intended to verify actual condition of the cave use in the Gusuku period (medieval period) from archaeology, zooarchaeology, archaeobotany, and osteoarchaeology through excavation of Hosu Cave 4th Entrance Site on Okierabu Island. And it is compared with the other cave sites in Ryukyu Islands.

As a result of the comparison, it is possibly assumed that the Hosu Cave 4th Entrance site was used for ritual site by judging from the following evidences: a narrow scale of the cave, there is almost no flat side internal structure of the cave, and an inner site of the cave which sunlight does not reach, a lack of subsoil water, a scarcity of artifacts and their combination, a specific pattern of abandoned artifacts debris, and a large quantity of cow bones at dried up groundwater course and only carbonized barley -rice, wheat, barley, millet are found in Amami Islands in the Gusuku period-, confirmed from the hearth.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：南西諸島 沖永良部島 洞穴遺跡 グスク系土器 ウシ骨 オオムギ 祭祀遺跡 学際的研究

1. 研究開始当初の背景

国内における洞穴の学術調査は、自然科学系調査が主となっており、いっぽう人文科学系の調査では、研究対象が初期人類の定着の研究を目的として旧石器時代～縄文時代の初めごろに集中している傾向にある。南西諸島の研究もまた同様である。

特に鹿児島県域ではこれまでほとんど洞穴遺跡の調査例がなかった。このなかにおいて、沖永良部島は200以上の洞穴が存在していることが分かっており、日本全国の大学探検部、探検隊によって測量図も公開されている。また、猛毒蛇ハブもいない島であるので、調査には最適な島であると考えられた。

2. 研究の目的

沖永良部島のグスク時代(中世)洞穴遺跡をターゲットとし、島嶼という環境下において、洞穴の利用は恒常的か一次的か、あるいは、居住空間か墓か、などという洞穴利用の実態を明らかにし、そのモデルを南西諸島の洞穴利用の実態として敷衍することに着想した。考古学における従前の研究は、洞穴奥部までいたることなく、その岩陰部や洞口付近の調査で終始しており、洞穴内部の状況についてはほとんど分かっていない。そのため、洞穴奥部にいたる洞穴利用の実態について明らかにすることを目的として、考古学、動物考古学、植物考古学、骨考古学等の多角的視点で分析・実証する。

3. 研究の方法

本研究は3年間の研究期間において南西諸島のグスク時代の洞穴利用の実態を把握することを目的としている。主として、沖永良部島の2か所の洞穴遺跡を調査することによって、洞穴のどの部分を利用し(空間利用)、その頻度(恒常的な定住・一次的な避難シェルター)、利用目的(居住空間・墓域・祭祀空間・狩猟や水源確保)など、その具体的な利用実態を把握する。そのためには、①人類の使用した道具による推定のみならず、②陸産貝類や脊椎動物遺体の同定から想定される当時の洞穴環境というバックグラウンド、③人骨の形質人類学・骨考古学的分析による形質的特徴と死因、④放射性炭素年代測定による年代推定などによって、目的の達成を目指す。

そして、日本考古学会、日本洞窟学会、日本動物考古学会において学会発表を行ない、最終的な調査成果報告書を作成する。

4. 研究成果

(1)沖永良部島における洞穴遺跡の二つの性格が明らかとなった。

「鳳雛洞第4洞口遺跡」は、グスク時代(中世並行期)の洞穴祭祀遺跡の可能性が高いことを明らかにした。その理由としては、

a) 日光の差し込まない洞穴奥部に遺跡が形成されていること、

b) 洞穴内は極めて狭く、平坦部がほとんどないこと、

c) 水量に乏しいこと、

d) 遺物数が少ないこと(図1・2)、

e) 遺物組成に乏しいこと(ほとんどグスク系土器とカムイヤキに限定される;図1・2)、などから恒常的な生活領域としては不向きであり、長期的な人工遺物堆積がみられない。

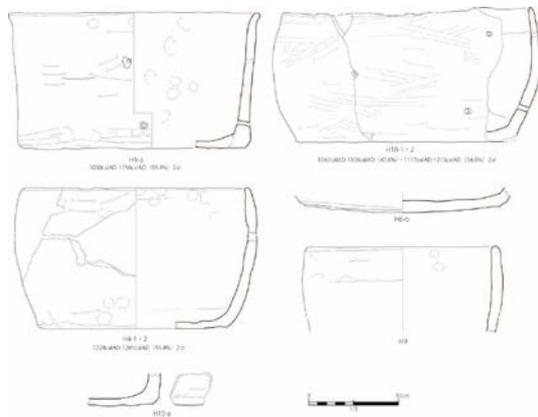


図1 鳳雛洞第4洞口遺跡の土器

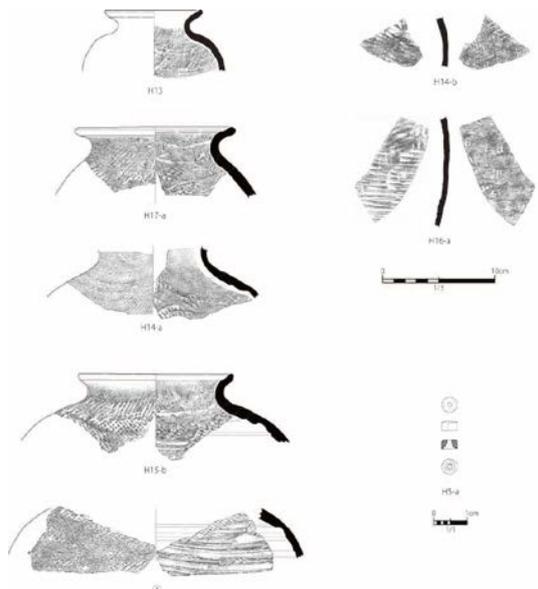


図2 鳳雛洞第4洞口遺跡のカムイヤキと貝珠

f) また、土器に一定の廃棄パターンがみられること(分割され、一方はそのまま壁などに立て掛け、一方はさらに分割して並べる;図3)、

g) 南西諸島で通有にみられるような食料残滓としての海産貝類が全く見られず、そのかわりに解体痕のないウシ骨が洞内に散在していること(図4)、

h) この時代にはコメ、オオムギ、コムギ、アワ、キビなどが出土するが、水洗選別の結果、洞内のひとつの炉(炉F)からはオオムギのみが高密度で確認されたことである(図5)。

i) 土器の煤、炉の炭、ウシ骨の放射性炭素年代測定結果は、すべて11~13世紀代の年

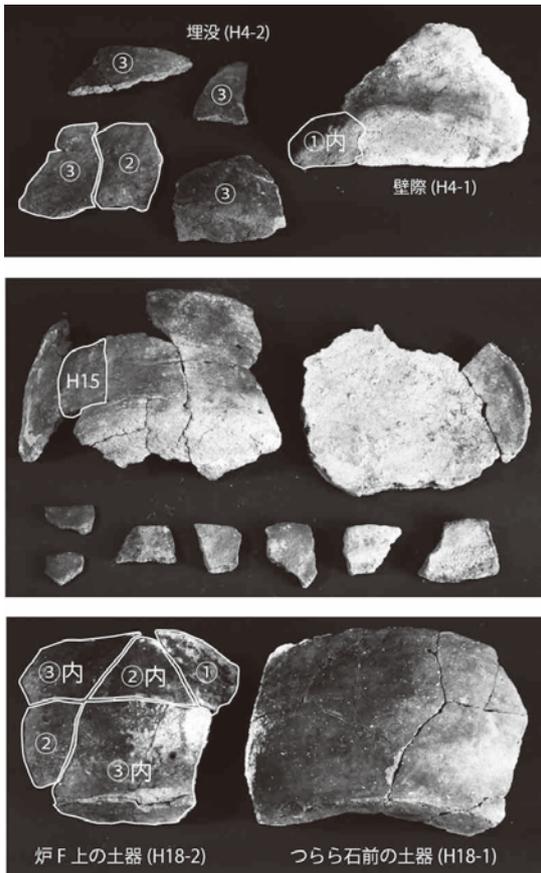


図3 土器の廃棄パターン



図4 鳳雛洞第4洞内ウシ骨

代となり、

これまで不明瞭であった奄美諸島グスク時代の遺跡の存在と、極めて珍しい農耕開始期の祭祀遺跡として判断されたのである。



図5 炉Fとオオムギ

いっぽう、「大山水鏡洞第1洞口」（未だ遺跡とは認定されていない）では、鳳雛洞第4洞口遺跡と同様の時期と考えられるが、夥しい量のグスク系土器、ヤムイヤキ、そして中国陶磁器やガラス玉などがあり、海産貝類も認められ（図6）、遺物数や遺物組成の豊富なこと、水源が豊かであること、洞穴内に大きなホールが存在することなどから、鳳雛洞第4洞口遺跡と異なる生活の場として認識された。

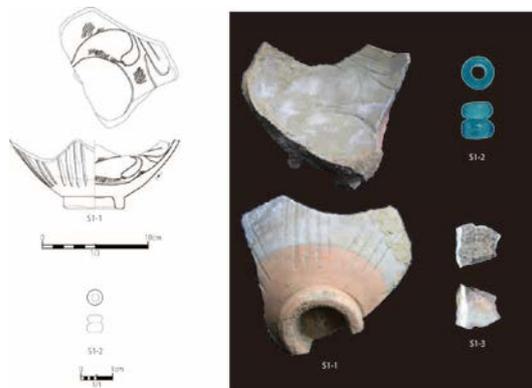


図6 大山水鏡洞の陶磁器・ガラス玉・海産貝類破片

(2)南西諸島のグスク時代（中世）洞穴遺跡の

比較検討の結果、炭化穀類やグスク土器の出土など要素が類似した洞穴遺跡も沖縄諸島久米島などが存在しており（久米島・ヤジャーガマ遺跡、下地原洞穴遺跡等）、農耕に関わる祭祀遺跡は、南西諸島通有の現象である可能性が高い。

(3)ウシ骨について

日本本土では、農耕に関わるウシの「動物犠牲」と「動物儀礼」が考古学的に確認されており、前者が古代、後者が中世に出現する。南西諸島においてはグスク時代（11～14世紀）から農耕や農耕使役用のウシがもたらされたと考えられている。鳳雛洞第4洞口のウシ骨と炉Fのオオムギの出土およびその放射性炭素年代からは、南西諸島の農耕開始期に、日本から穀類やウシとともに動物儀礼も導入されたことを想定した。

以上のように、従来不明瞭であった奄美諸島のグスク時代（中世）の遺跡の存在と洞穴利用状況、そしてその年代が放射性炭素年代測定によって明らかになるとともに、農耕開始期に穀類やウシがもたらされ、同時に動物儀礼も導入された可能性と、それが南西諸島に普及したことを実証した本研究は、大きな意義があったものと考えている。

また、沖永良部島のふたつの洞穴では、その環境から遺物がほとんど埋没しておらず、約800年前の状況のまま残されている。これは、同島の貴重な埋蔵文化財資源であり、現在盛んとなっている観光のためのケイビング業界にとっても、埋蔵文化財の観光資源化に貢献できるモデルケースとなる可能性を秘めている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計27件）

(1)新里貴之、沖永良部島鳳雛洞第4洞口遺跡の特質、*Archaeology from the South II*、新田栄治先生退職記念事業会、査読無、2014、289-300

(2)新里貴之、沖永良部島洞穴奥部のグスク時代遺跡、第6回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会：鹿児島・沖縄考古学会の最新動向、鹿児島県考古学会・沖縄考古学会、査読無、2013、59-70

(3)新里貴之、牧野浩典、鐘ヶ江賢二、黒住耐二、樋泉岳二、篠田謙一、竹中正巳、米田 穰、ほか6名、南西諸島沖永良部鳳雛洞遺跡の調査、日本考古学協会第79回総会研究発表要旨、日本考古学協会、査読無、2013、62-63

(4)高宮広土、新里貴之、琉球列島貝塚時代における社会組織の変化、古代文化、古代学協会、査読有、64巻4号、2013、98-110

〔学会発表〕（計21件）

(1)牧野浩典、新里貴之、鐘ヶ江賢二、黒住耐二、樋泉岳二、篠田謙一、竹中正巳、米田 穰ほか6名、沖永良部島鳳雛洞第4洞口遺跡の

調査報告、日本洞窟学会第39回大会、2013年11月16・17日、東京

(2)樋泉岳二、菅原広史、黒住耐二、新里貴之・高宮広土、グスク文化成立期の脊椎動物資源利用、日本動物考古学会第1回大会、2013年11月16・17日、東京

(3)黒住耐二、新里貴之、高宮広土、貝類遺体からみた沖縄のグスク文化成立期、日本動物考古学会第1回大会、2013年11月16・17日、東京

(4)新里貴之、沖永良部島洞穴奥部のグスク時代遺跡、第6回鹿児島県考古学会・沖縄考古学会合同学会、2013年11月2・3日、沖縄

(5)新里貴之・牧野浩典・鐘ヶ江賢二・黒住耐二・樋泉岳二・篠田謙一・竹中正巳・米田 穰ほか6名、南西諸島沖永良部鳳雛洞遺跡の調査、日本考古学協会第79回総会、2013年5月25・26日、東京

〔図書〕（計5件）

(1)新里貴之（編）、鹿児島大学、沖永良部島鳳雛洞・大山水鏡洞の研究、2014、126頁

(2)新里貴之・高宮広土（編）、六一書房、琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究論文集（第1集）：琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化、2014、311頁

(3)新里貴之（編）、鹿児島大学、徳之島トマチン遺跡の研究、2013、287頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

新里 貴之 (SHINZATO Takayuki)
鹿児島大学・埋蔵文化財調査センター
・助教

研究者番号：40325759

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

牧野 浩典 (MAKINO Hironori)
東海大学・情報理工学部・准教授
研究者番号：40338786

黒住 耐二 (KUROZUMI Taiji)
千葉県立中央博物館・動物学研究科
・上席研究員
研究者番号80250140

篠田 謙一 (SHINODA Kenichi)
国立科学博物館・人類研究部・グループ長
研究者番号：30131923

竹中 正巳 (TAKENAKA Masami)
鹿児島女子短期大学・生活科学科・教授
研究者番号：70264439

米田 穰 (YONEDA Minoru)
東京大学・総合研究博物館・教授
研究者番号：30280712